

# 待機環境が待機中の動作と気分に及ぼす影響

松下 藍

本研究の目的は、快適な待機環境の創造の一助となるべく、待つ場所として選択される場所の特性を明らかにし、待機時間や他者の存在による待機時の気分や快適性への影響を検討することである。

まず、実験Ⅰでは駅コンコースでの待ち合わせ場面を想定し、待つ場所として選択される場所の特性、およびその特性の優先順位について物理的環境要因（視覚刺激の有無と程度、柱の有無など）や行動要因（待っている際の行動）、待ち時間（待ち合わせ時間の30分前、10分前、5分前、5分後、20分後）を操作することによって検討した。それにより、待つ場所の特性として以下の(a)～(d)の結果が得られ、物理的環境要因や行動要因、待ち時間による待つ場所の選択への影響が明らかとなった。特に、待ち時間が大きな影響を与え、待ち合わせ時間から離れている場合には、自らの興味・欲求を充足させることのできる場所を選択し、待ち合わせ時間の前後となる場合には、待ち合わせ相手と容易に合流できる場所を選択する傾向が見られた。

- (a) 身体的負担が少ない
- (b) 自らの興味・欲求が満たされる
- (c) 安全性が保たれる
- (d) 待ち合わせ相手の探索に容易である

次に、実験Ⅱでは待合室を想定し、待機時間や他者の存在による待機時の気分や快適性への影響を検討した。他者の存在については、今回は他者の配置に着目し、他者が正面にいる場合、斜め前方にいる場合、横にいる場合を比較した。テーブルと座席の用意された実験室にて、初対面の他者と共に短い待機時間もしくは長い待機時間を経験させ、質問紙により待機時の気分の変化や快適性の程度を測定した。それにより、以下の(1)～(4)の結果が得られた。

- (1) 待機時間が長い場合のほうが短い場合に比べ、倦怠感が増す
- (2) 他者が横にいる場合が最も他者の存在による負の影響が見られ、気分や快適性が損なわれる
- (3) 女性は男性より気分の落ち込みが見られる
- (4) 他者への意識が高い程、気分の落ち込みは少ない

以上のことから、実験Ⅰより待つ場所として選択される場所への待ち時間の大きな影響が見られた。実験Ⅱより待機時間や他者の配置による待機時の気分や快適性への影響の差異が見られ、また個人特性による影響も見られた。何もすることができない状態の待機事象は気分や快適性が損なわれることから、人は何らかの刺激を求めることがいえた。

最後に、本研究で得られた知見をもとに快適な待機環境の創造のための一案として、人の興味を満たす自由探索型のエリアの設置を提案した。